

第2章 文化的景観の特性と重要文化的景観の価値

2 - 1 文化的景観の特性

本市では、旧城下町区域及び卯辰山区域を、金沢市景観計画において「文化的景観区域」と位置づけ、風格ある歴史的景観を保全しつつ、時代に合わせて移り変わりゆく都市景観が全体的に調和した、重層性ある景観づくりを進めるものとしている。

以下では、その文化的景観の特性を自然、歴史、生業の視点から示す。

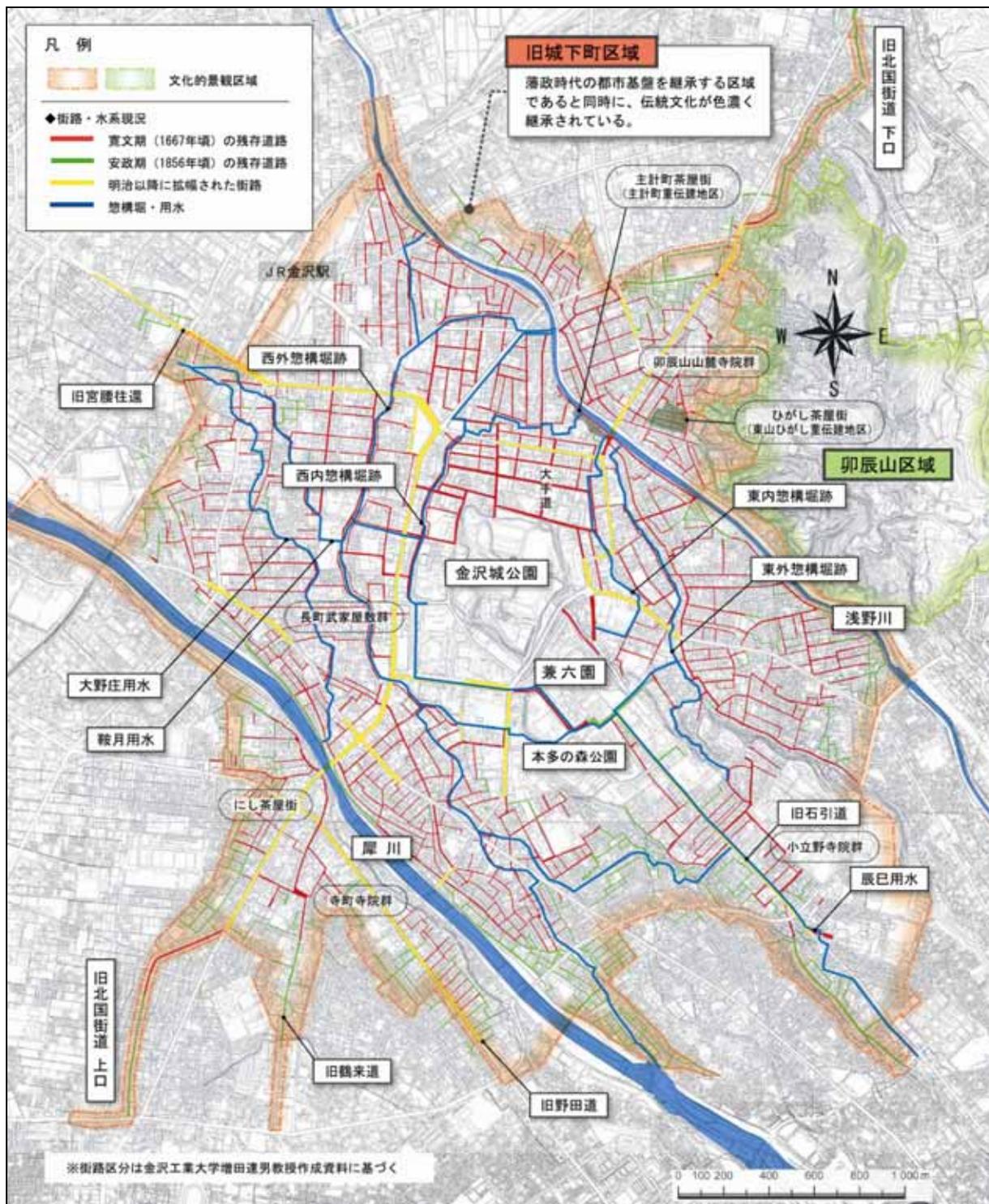
(1) 金沢市街地の形態的な特徴は、城下町の初期からの計画性に基づくものであり、武士が支配した藩政期の社会的・文化的背景に基づく計画の理念が、現在の都市景観に影響を与えている。

金沢は、寺町台地、小立野台地、卯辰山の3つの台地・丘陵と、その間を流れる犀川、浅野川の2つの河川が形成する起伏に富んだ自然地形を有する。この自然地形を基盤として、その特徴を活かしながらかきわめて計画的に城下町が形成された。

文化的景観保存調査の結果、現在の市街地に重層的に認められる城下町の基本構造は、概ね寛文年間に完成し、大規模な改変を加えられることなく現在に至っていることが確認された。つまり、現在の金沢市街地全体の形態的な特徴は、城下町の計画性に基づくものであり、藩政期の社会的・文化的背景に基づく城下町の計画理念の影響を受けている。具体的には、藩政期の遺構である金沢城跡や惣構跡、都市水系としての河川・用水、街路網、旧町人地の地割の上に立地する町家等の有形の諸要素に特に反映されている。これは、城下町建設後、藩政期を通じて幾度かの災害に遭うものの、それを起因とした都市改造がほとんど無かったことや、明治以降の都市の近代化の時点においても、藩政期に由来する都市機能をほとんど変えずに継承してきたためである。例えば、「学都」と呼ばれる所以となった明治期の第四高等中学校は、藩校と概ね同じ場所に建てられ、学びの場という場所性が継承されている。このように、都市の表層景観は藩政期の頃と違いがあっても、町場全体に及ぶ場所性は藩政期からほとんど変化しておらず、旧城下町時代に造られた歴史的遺産やその場所がもつ性格付けと関連した建造物など、多様かつその後の各時代の重層性を顕著に示した都市景観を生み出している。

金沢市街地に見られるもう一つの特徴である地域コミュニティの基本単位「町会」の区分は、藩政期の歴史や町割が強く影響を与えている。藩政期の町人地では、各町の町肝煎が中心となって運営され、また家内工業が盛んだったため、地域での支え合いの土壤が育まれていった。昭和30年代に、ほとんどが新町名に統合・改正されたが、古い町名が「町会」の名前として現在も残り、「町会」を基本とする地域の活動が盛んである。近年では、いったん失われた旧町名を復活する地区が多くみられるとともに、自分たちの手でまちをより美しくしようとする動きも活発化している。具体的には、住民と行政の間で建築物の意匠や形態、用途などを取り決めるなどのまちづくり協定を結び、地域のことは地域で考え、まちを守り育ていこうとする地区が増えてきている。また、町会が集まり校下を形成し、校下単位に公民館が設置され、地域活動の母体として根付いている。その他にも、「善隣館」のように社会福祉を市民で支える組織や「NPO 法人金澤町家研究会」「老舗・文学・ロマンの町を考える会」のような市民主体のまちづくり活動団体などもあり、連帯の土壤が現在に受け継がれ、独特のコミュニティを形成している。

このように、藩政期の歴史や町割りに由来する地域コミュニティは、周辺環境と相まって金沢らしい雰囲気をつくり、都市景観に大きな影響を与えている。



文化的景観区域の都市構造図

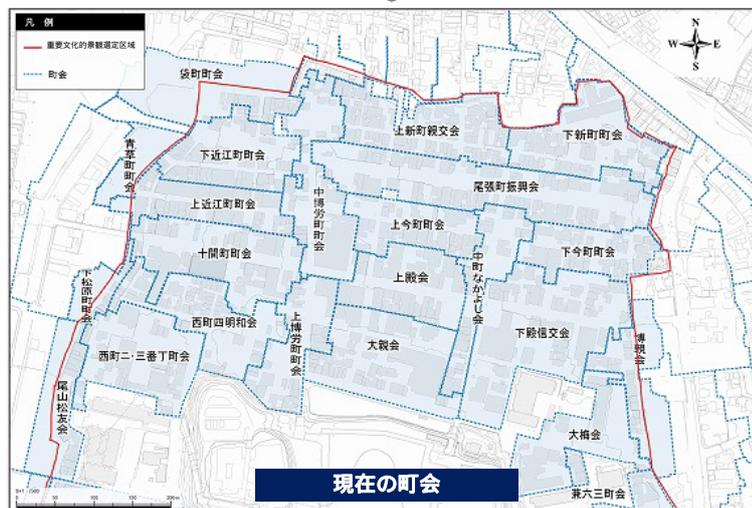
出典：「金沢の文化的景観 城下町の伝統と文化」保存調査報告書



現在の金沢の地形（航空写真）



町人地の町名は藩政期からあったが、梅本町や下胡桃町などの武家地の町名は、明治期に町立てされる際に藩政期の歴史等に由来して名付けられたものである。



尾張町付近の旧町割と現在の町会区分図

【金沢市における地域コミュニティ活動の事例】

公民館

金沢市では、昭和24年(1949)の公民館設置条例により、校下(小学校区)単位に公民館が設置され、地域活動の拠点として機能している。現在、市内には地区公民館が60館あり、その他に金沢市中央公民館長町館と彦三館がある。公民館が、小学校区ごとにあるという金沢のような例は、全国でもあまりみられない。館長は市教育委員会が任命し、主事は館長が任命して、公民館委員は町会から選ばれている。自分たちで運営し、地元負担と地域主導、ボランティアによって活動が支えられているこれらの方法は「金沢方式」と呼ばれ、金沢の地域コミュニティの特徴となっている。

出典：金沢市地域福祉計画

善隣館

善隣館は金沢の福祉の原点といわれ、経済的に不安定な人や身体に障害のある方に対して、自宅開放などによって救済したのが始まりといわれている。最初の善隣館は、昭和9年(1934)に作られ、昭和35年(1960)までに19館が作られ、現在12館が市内に残っている。創設当時の授産事業は、時代の移り変わりによって機能を低下させてきたため、現在ではデイサービスと保育所を中心とする施設に生まれ変わっている。善隣館は、今もなお色濃い金沢の連帯意識の所産となっている。

出典：金沢市地域福祉計画

老舗・文学・ロマンの町を考える会

昭和61年に設立され、浅野川界隈を対象に様々な活動に取り組んでいる。具体的には、主計町検番前への桜の植樹、梅の橋のたもとへの滝の白糸の像の設置、界隈景観賞の表彰、浅の川園遊会などが挙げられる。

〈界隈景観賞〉

昭和62年に創設され、新築や改築、守り続けているもの、塀、門、庭、看板、のれん、ショーウインドウなどを対象に、毎年3～5件表彰している。選考基準は、①界隈景観に調和した建物、②子孫の代に残せるまちづくり、③まちづくりへの気配り、④界隈への緑化の寄与ということを設けているが、ルールを決めないことがルールであるため明確な基準はなく、会の役員で選考している(専門家は入れず、地元で長く住んでいる住民の視点で選考)。このような景観賞の取り組みを長く続けることで、この界隈が自然と良くなることを目指している。

【界隈景観賞受賞作品の例】



表門、蔵等の伝統的建築物を残しながら増築された料理旅館(1988年受賞)



玄関前に手入れされた坪庭のある医院(1988年受賞)



近代建築が特長の医院(2008年受賞)

NPO 法人金澤町家研究会

金澤町家研究会は、金沢市における風格と魅力あるまちなみの形成の促進及び市民主体のまちづくりの推進を目的に、平成20年2月に設立されたNPO団体である。市内関係者を中心とする約70名で構成され、金澤町家の継承・活用に向け、町家居住者や町家住まいに関心のある方に対して、町家の修復等に関する研修事業、町家を利用した交流事業、情報発信事業などを行っている。

出典：NPO 法人金澤町家研究会ホームページ

(2) 近世以来継承されてきた工芸技術が、金沢市民の生活や生業面に大きな影響を与えている。

金沢の近世城下町としての整備は加賀藩の発展とともにあったが、三代藩主利常が経済的基盤を確立するためにとった農政改革である「改作仕法」の施行後、藩の財政は豊かになり、その財力を背景に美術工芸の振興が図られた。当時の加賀藩の文化活動として特筆されるものに、優れた文物の収集と美術工芸品を中心とした「ものづくり」の育成がある。特に京や江戸から招聘した各分野の名工を御用職人として城内「御細工所」の職人指導にあたらせ、やがてその技術は町方の細工人にも広まっていった。当初、「御細工所」は武器武具の修理・管理を行う組織であったが、三代藩主利常は管理部門と修復・製作部門を組織化すると同時に茶の湯道具、掛幅、印章など美術工芸品の製作や修復を手がけるようにした。また五代藩主綱紀の頃になると「御細工所」の職種は、針細工、小刀細工、紙細工、絵細工、塗物・蒔絵細工、象嵌細工など20種を越えるまでになった。なお、御細工者は、元禄元年(1688)から本職のほかに能の技芸も錬磨することが求められるようになり、能楽の伝統を維持する上でも大きな役割を果たした。また、天才的な学芸感覚を有する綱紀は、古今東西の図書を収集したほか、全国から2千点を超える工芸・技術資料を収集し、整理・分類した「百工比照」なるコレクションを完成している。

明治期以降、政府による廃藩置県によって、5万人いた武士とその家族は、その多くが金沢から離散し、また武士たちのパトロンを失った商人や職人たちの経済力や生産力は一気に衰えて相当に疲弊したという。しかし、藩の御細工所の技術を活かした金工を中心とする新しい金沢銅器会社が設立され、その商品等を欧米諸国の万国博覧会に出品することで、金沢の高い工芸技術が広く世界に知られることとなった。特に欧米向けに輸出用の花瓶や装飾品、食器などを、加賀象嵌や九谷陶磁器などの技術によって生産し、明治初期の石川県の殖産事業として活性化することができた。これらの商品の愛好者は増え、その後消費者は、観光客にも広がった。

現在も、こうした工芸技術は継承されており、市内に数多くの工芸作家や伝統工芸に関する店舗を有している。そして、本市や伝統工芸の各種組合は、伝統工芸品の現代的なデザインアレンジと新規販売経路の開拓、若手作家の育成(卯辰山工芸工房や金沢美術工芸大学)など、工芸技術そのものの維持・継承を積極的に行っている。さらに、金沢というブランド力は、工芸技術の水準や伝統的な美意識の確かさと、製品へのこだわりや誇りをあらわしており、城下町という空間的イメージと相俟って、高級消費財としてのイメージとして定着している。そして、現代の金沢は、これらと関連した諸道具を作り、販売する商店なども含めて「金沢ブランド」ともいえる独自の文化産業を成立せしめている。

平成21年(2009)6月8日にユネスコ(国際連合教育科学文化機関)のクラフト分野で、「創造都市ネットワーク」に登録された。すなわち金沢の伝統工芸の特徴や工芸を育んできた文化的土壌、新たな産業の展開、文化創造への取り組み方などが評価され、登録を受けたものであり、「ものづくりのまち・金沢」を世界に向けて広く発信することとなった。

このように、近世に生み出された城下町としての象徴的な価値である工芸技術は、金沢市民の生活や生業面に大きな影響を与えている。



加賀蒔絵と加飾の様子



加賀象嵌



加賀友禅



金沢箔（箔移し）と金沢仏壇

(3) 近世に育まれた生活様式等が現在も色濃く残り、金沢市民の生活感覚の中に受け継がれている文化がある。

往時の加賀藩の能楽は、藩お抱えの能役者が舞う「藩主の能」と庶民が神に奉納する神事能を舞う「庶民の能」があり、五代藩主綱紀が宝生流を取り入れたことから「加賀宝生」として栄えた。綱紀は、武家の式楽として能の保護、育成を図り、庶民にも広く奨励したことから、このまちは「空から謡が降ってくる」とまでいわれるようになった。また、明治維新を迎え、武士階級の衰退により一旦は衰えるものの、加賀宝生「中興の祖」といわれた佐野吉之助の尽力で再び広く市民の間に広がった。現在も、その嗜みは継承されており、石川県立能楽堂や平成18年(2006)に新たに金沢能楽美術館を開設するなど、能楽に関する施設面でも充実している。平成20年(2008)からは、世界的なクラシック音楽祭となるラ・フォル・ジュルネ金沢を開催し、特に平成21年(2009)に開催された音楽祭では、モーツァルトの音楽と能とのコラボレーションの演目を行うなど、新たな文化の取り組みと創造への広がりを見せている。また、金沢市内には工芸分野の重要無形文化財保持者や文化勲章受章者等が在住し、金沢の伝統文化の継承に影響を与えていることも特徴である。

金沢に息づく伝統文化の代表的なものとして茶の湯がある。金沢に茶道が花開いたのは三代藩主利常と五代藩主綱紀の時代であった。利常は寛永2年(1625)、宗和流の始祖・金森宗和の子、七之助を茶道の指南役として加賀藩に召し抱え、また綱紀は寛文6年(1666)に京都から裏千家四世千宗室千叟を招き裏千家流茶道の普及に努め、同時に工芸や作庭、建築などの分野にも大きな影響を与えた。このように綱紀は、能楽とともに茶道についても文化振興を図り、武士はもとより職人や商人たちにも、お茶とお能の作法や教養を身に付けることを奨励した。このことにより、現在でも市街地には多くの和菓子屋や銘茶店、茶室を持つ商家、露地庭園が分布し、茶の湯は人々の暮らしに広く普及している。

このように、伝統的作法や教養を身につける「嗜み」の文化は、藩政期に由来したものであり、現在も市民の生活にしっかりと受け継がれている。そして、茶室や露地庭園のある場所では日常的に茶会が行われ、また能楽鑑賞もたびたび開催されている。一方、このような近世城下町からの高い文化性や価値観、生活に息づく美意識が金沢市民に継承されていることもあって、金沢21世紀美術館などの文化を継承し、発展するための新しい施設についても市民から高い関心が寄せられている。

また、金沢市民には、冠婚葬祭や人生儀礼など特別な日の贈答慣行だけではなく、日常的にも特有の贈答慣行が今でも顕著にみられる。こうした慣習自体が金沢の精神的風土であり、何事も丁寧なふるまう武家文化の名残として、今もうかがい知ることができる。

以上、近世城下町の構造や象徴的な要素を継承する市街地「金沢」を舞台に、今日、日本を代表する質の高い伝統文化が市民の生活感覚の中にしっかりと受け継がれ、それら多様な文化を継承するための場として、茶室、庭園、能舞台などが現在も機能している。さらにそうした文化的素養に基づく伝統産業の需要があることによって、市内の工芸作家や職人、伝統産業に関連する生業が維持継承されていることになる。これらは、相互に有機的な関係を保ちつつ一体性を有し、「金沢の文化的景観 城下町の伝統と文化」の本質的価値を示すものである。

さらにいうならば、「金沢の文化的景観 城下町の伝統と文化」は、単にこれら文化的景観の特性および価値を示すだけでなく、我々日本人が広く近世都市である城下町とその文化を認識する際の象徴的な事例として位置づけることができる。



加賀宝生



加賀宝生子ども塾発表会



石川県立能楽堂



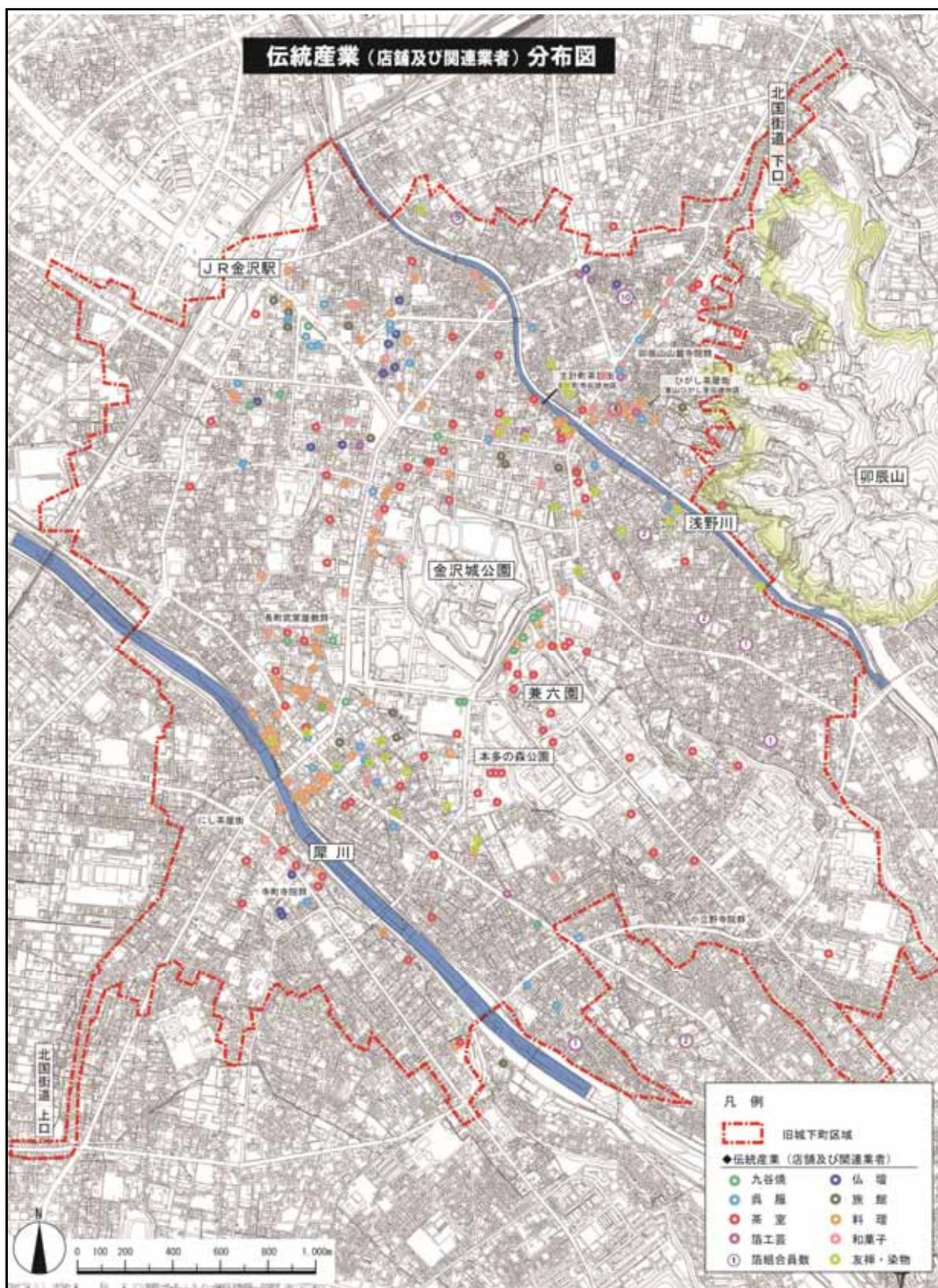
金沢能楽美術館



茶会の様子



五色生菓子



伝統産業（店舗及び関連業者）分布図（2007年 タウンページ等により調査）

出典：「金沢の文化的景観 城下町の伝統と文化」保存調査報告書

《採掘・製造、流通・往来及び居住に関連する文化的景観の評価指標》

平成22年3月に、国から、都市に関連する文化的景観の調査報告として「採掘・製造、流通・往来及び居住に関連する文化的景観の保護に関する調査研究（報告）」が報告された。

報告の中で、全国に所在する多様な文化的景観に対する総合的な所在調査を実施し、「採掘・製造、流通・往来及び居住に関連する文化的景観」の評価手法について検討が行われた。その評価指標を以下に示す。

【評価指標A】

- 一定の場・空間に所在し、自然的・歴史的・社会的主題を背景とする一群の要素が全体としてひとつの価値を表していること
- 諸要素の関係及び機能が、現在に至るまで何らかの形で維持・継続されていること
- 記憶・活動・伝統・用途・技術等の無形の要素に特質が見られること
- 一般に広く受け入れられていること

【評価指標B】(は事例)

景観が歴史的・社会的に重層して形成されていること(景観の重層性)

- 都市の計画又は設計理念が明確かつ特質を持つこと(例：金沢市街地)
- 計画の全部又は一部が地割(緑地を含む)として残存すること(例：宇治)
- 過去の計画における土地利用の区分が現在の地割に影響を与えていること(例：萩市街地)
- 各時代に計画的に配置された街路・水路等の都市の骨格を表す痕跡が残存すること(例：堺環濠都市) 等

景観がある時代又はある地域に固有の伝統・習俗、生活様式、人々の記憶、芸術・文化活動の特徴を顕著に示し、象徴的であること(景観の象徴性)

- 地域における伝統や習俗等によって象徴的な意味をもつこと(例：高山市街地)
- 地域の人々の記憶の中で象徴的な意味を持つこと(例：平和大通り)
- 芸術・文学等において多様に表現されていること(例：城崎温泉街) 等

特定の場所とそこで行われる人間の行為(活動)との関係が景観形成に影響を与えていること(景観の場所性)

- 地域特有の生活・生業等によって独特の特性を持つ場所であること(例：巣鴨地藏通商店街)
- 地域社会・信仰等の観点から意味ある場所又は聖なる場所であること(例：浅草界限) 等

諸要素が形態上・機能上、有機的な連関を顕著に示し、全体として一つの価値を表していること(景観の一体性)

- 自然環境とその持続的な利用システムが景観形成において重要であること(例：四万十川流域)
- 地域における社会的・経済的なつながり又は諸制度(例えば、産業地-都市-港湾、都市-農村-産業-流通等)が、計画的・非計画的であることを問わず、全体として景観形成において重要であること(例：佐渡金銀山) 等

出典：「都市の文化的景観」

採掘・製造、流通・往来及び居住に関連する文化的景観の保護に関する調査研究会編

2 - 2 重要文化的景観の価値

(1) 各時代の土地利用の変遷を明確に反映し、都市の中心的な役割を担った地区

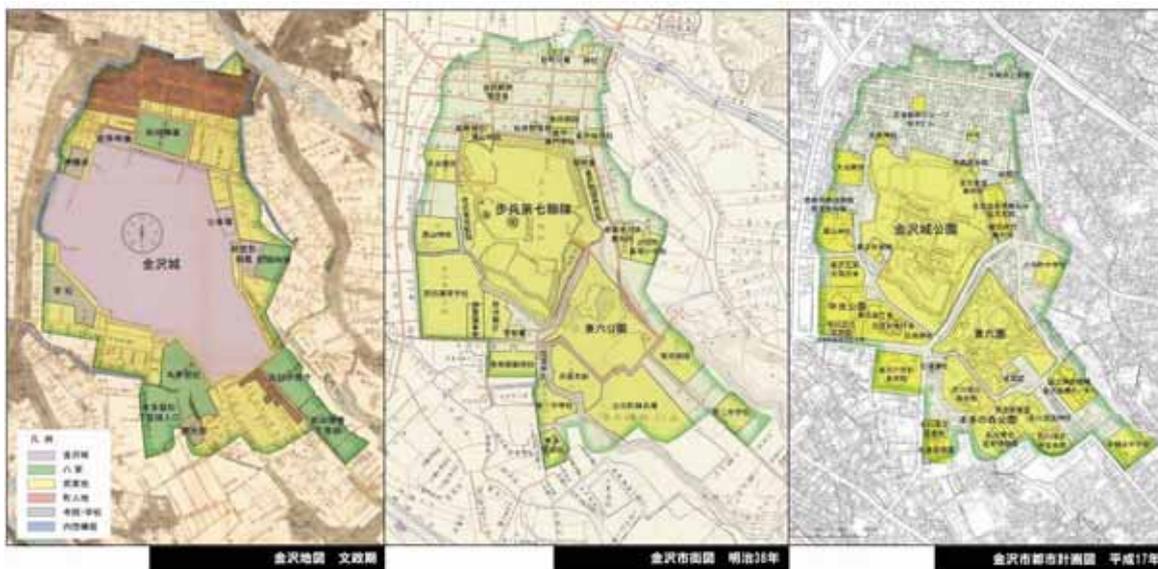
小立野台地の先端部は、中世期の寺内町（金沢御堂）に始まり、金沢城、陸軍第九師団、金沢大学と変遷し、現在は金沢城公園となり、市民に広く開放されている。また、平成20年（2008）に金沢城跡として国史跡の指定を受けている。

金沢城跡や兼六園を中心とする一帯は、市街地中心部の広大で緑豊かな空間を提供する憩いの場であると同時に、その一帯の歴史の変遷は金沢の中世・近世・近代・現代の変容を最もよく示す地域であり、まさに金沢市の歴史・文化を象徴する地区となっている。

また、金沢城跡と兼六園の周囲は藩政期の藩の施設をはじめ、上級武士や特権商人の居住した大きな町割が基本となっている。ここには現在も金沢市の行政・商業機能が集まるとともに、藩政期からの伝統を受け継ぐ庭園や茶室を持つ住宅等が見られる。さらに、歴史建築物を活かした資料館や博物館等の文化施設も集約されている。

なお、「金沢の文化的景観 城下町の伝統と文化 保存調査報告書」（金沢市：2009）において、木越 隆三氏により「近世城下町が、中世城館都市と異なる大きな特徴は、大名とその家臣団だけで構成する、軍事的性格に特化した閉じた都市空間ではなく、商業・流通機能、手工業生産地、信仰上の聖地も含み込んだ開かれた都市空間であったことにある。惣構内部の土地利用において、その点が象徴的に示され、近世城下町の都市計画の考え方が、ある意味で先駆的に示されたと考える。」と示されている。

このように、おおよそ内惣構に囲まれた範囲は、金沢城下の経済を牽引してきた場所であると同時に、洗練された芸術文化を育み受け継いできた場所でもある。



金沢城の変遷：金沢城（藩政期） 陸軍施設（明治・大正期） 金沢大学（昭和期） 金沢城公園（平成期）
 周辺の変遷：加賀八家（藩政期） 陸軍施設（明治・大正期） 教育施設（昭和期） 文化施設（平成期）

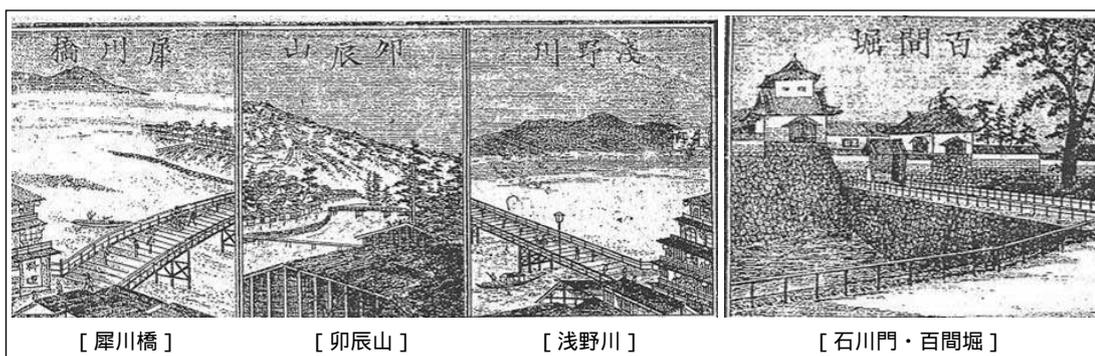
金沢城跡周辺の土地利用の変遷

左 金沢地図（金沢市立玉川図書館蔵）、中 金沢市街図（金沢市立玉川図書館蔵）

(2) シンボル性の高い地区として人々の意識に根付いた地区

『石川県下商工便覧』(明治21年(1888)作成)は、石川県内各地の商家や町のにぎわいの様子、名所などを紹介したもので、その大部分は金沢市内を描いている。また、明治期の『金沢名所』についても、金沢の名所を全国に紹介する観光用印刷物の一つであった。

これらの資料には、金沢の代表的な風景・名所として、犀川、卯辰山、浅野川、石川門、兼六園、尾山神社等の金沢市中心部がよく描かれている。金沢らしいシンボルとしてのイメージは、近代以降、産業振興・観光振興によって全国に浸透してきたことがうかがえる。



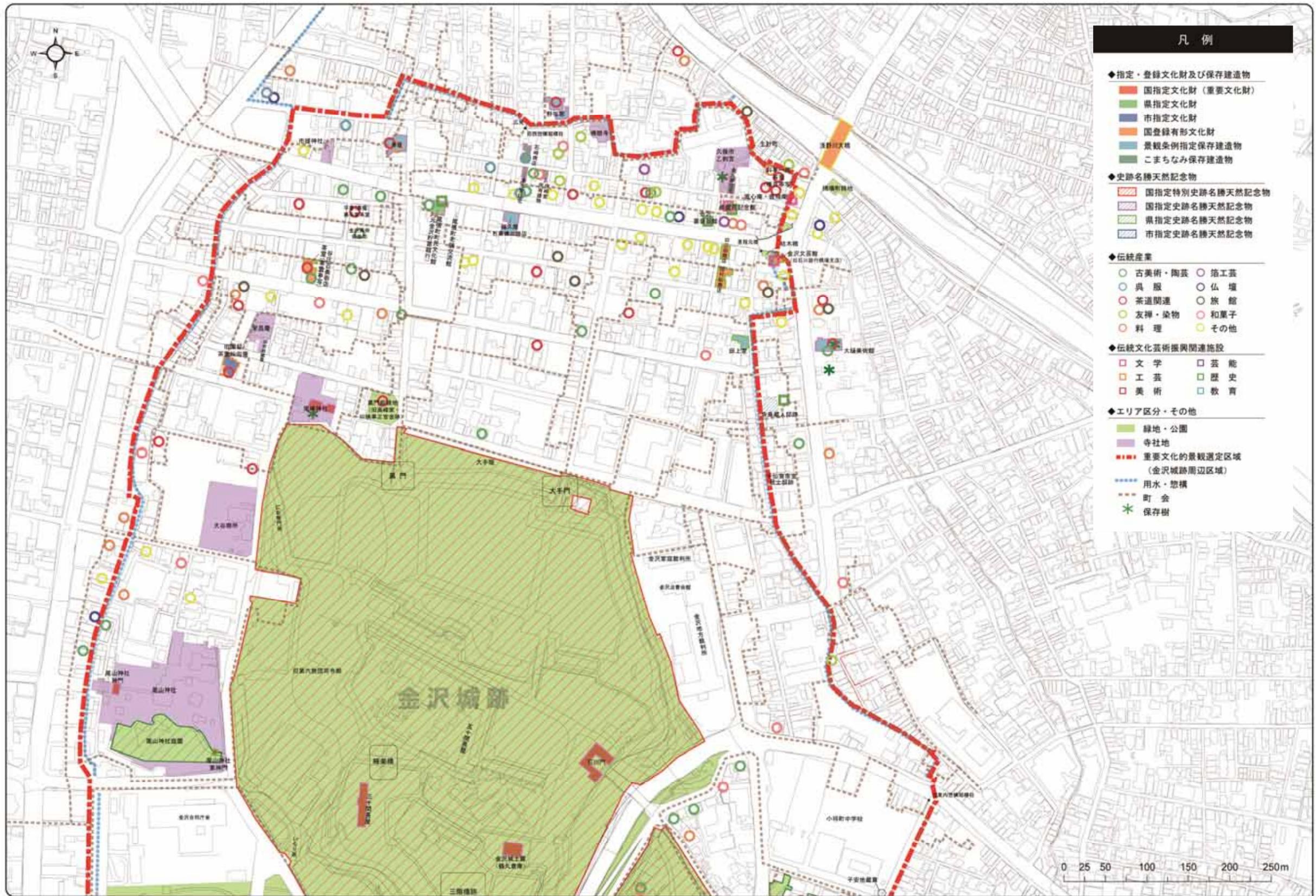
『石川県下商工便覧』(明治21年)の冒頭に掲載された名所・風景



観光パンフレット『金沢名所』明治30年(石川県立歴史博物館蔵)

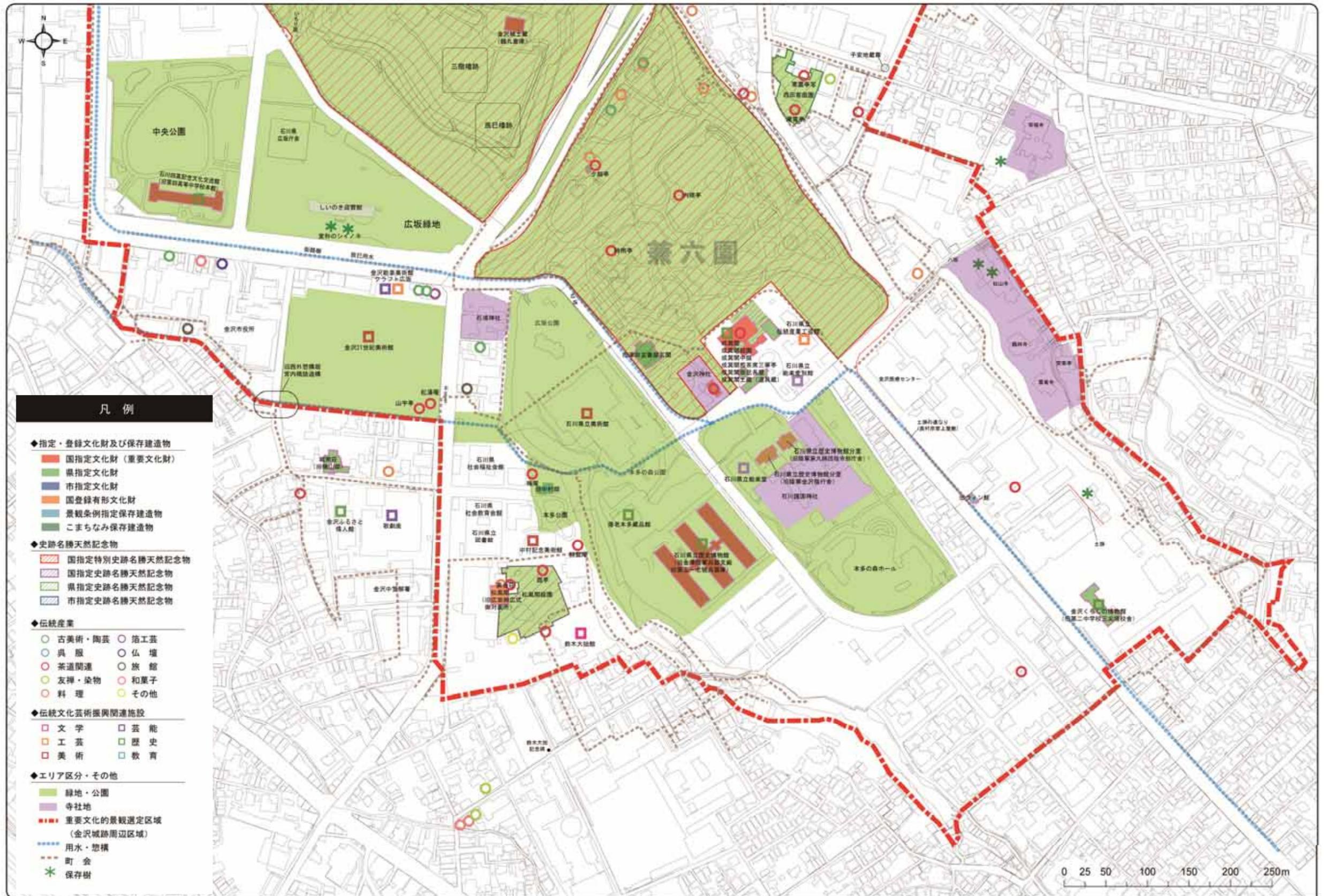
(3) 伝統産業や伝統文化芸術振興関連施設、歴史的建築物、武家庭園などが集積した地区

選定区域には、古美術や茶道、友禅・染物などの伝統産業のほか、それに伴う伝統文化芸術振興関連施設が集積している。また、石川門や尾崎神社本殿、尾山神社神門など、近世～近代の象徴的な歴史的建築物が数多くあるほか、兼六園をはじめとする藩政期に由来する武家庭園も集積した象徴性の高い地区である。



文化的景観の景観構成要素図の分布状況

出典：「金沢の文化的景観 城下町の伝統と文化」保存調査報告書（一部修正）



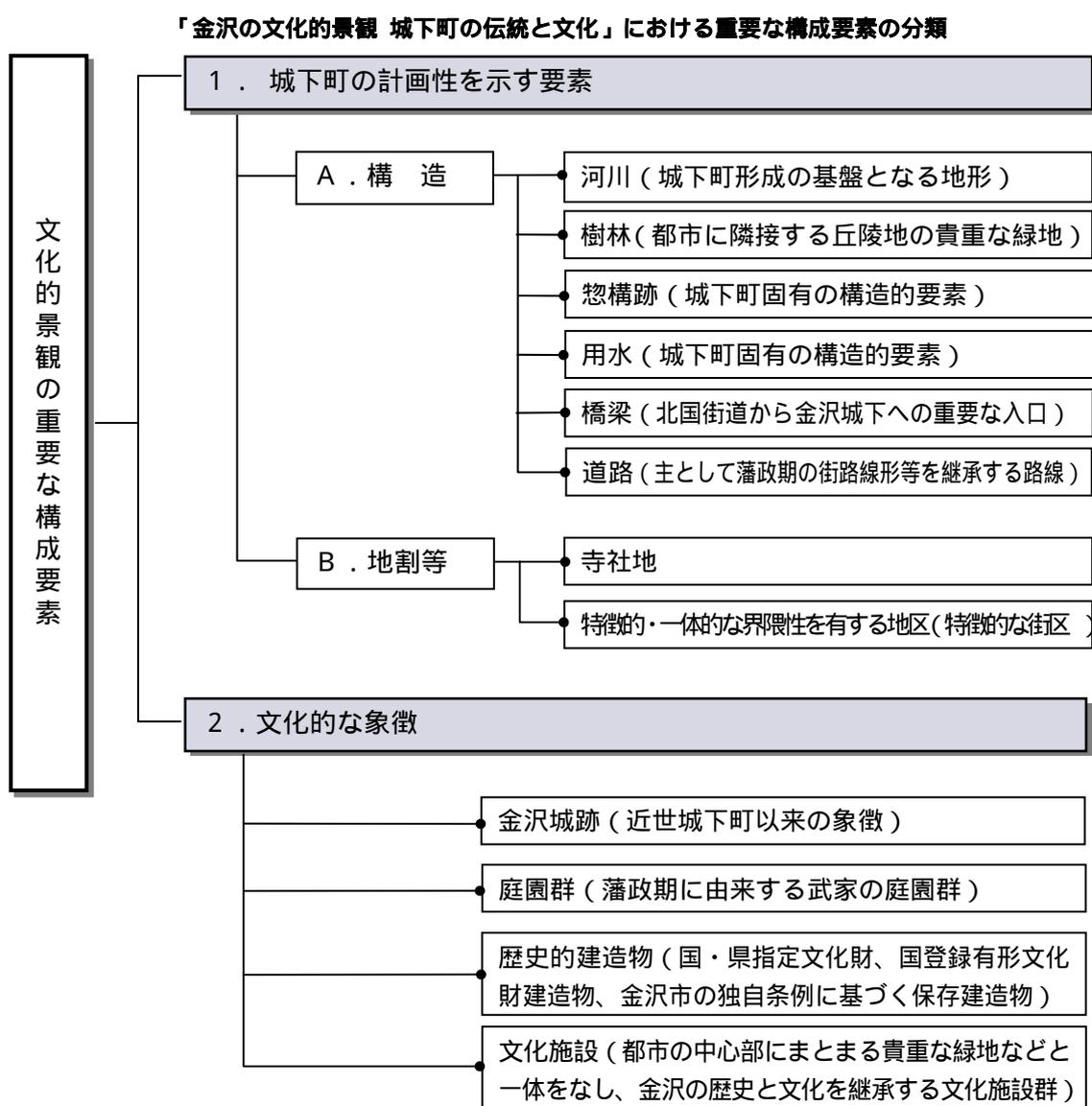
文化的景観の景観構成要素図の分布状況

出典：「金沢の文化的景観 城下町の伝統と文化」保存調査報告書（一部修正）

2 - 3 重要な構成要素（重要文化的景観の本質的な価値を示すもの）

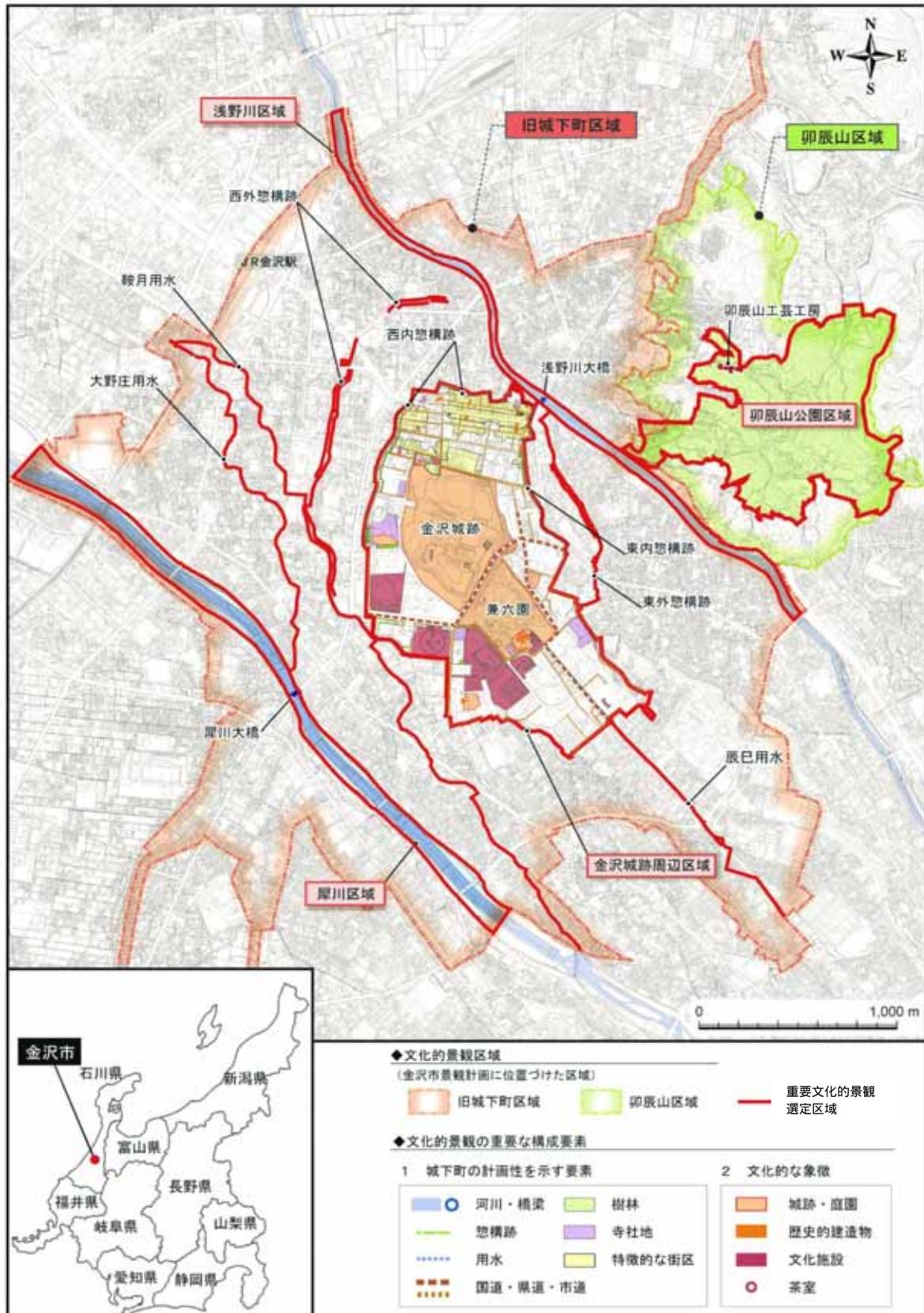
文化的景観における重要な構成要素とは、文化的景観の保存に関する必要な調査において特定する構成要素のうち、形態・意匠等が独特又は典型的であるとともに、技術・素材等の観点から顕著な固有性をもつものであって、文化的景観の本質的な価値を示し、保護の対象として不可欠な構成要素のことである。（平成20年7月31日20庁財第148号文化庁文化財部長通知より抜粋）

重要文化的景観「金沢の文化的景観 城下町の伝統と文化」における重要な構成要素は、「1. 城下町の計画性を示す要素」と「2. 文化的な象徴」の大きく2つに区分される。さらに、1. については、要素を「A. 構造」、「B. 地割等」の2つに細分類したうえで、個別要素について整理する。



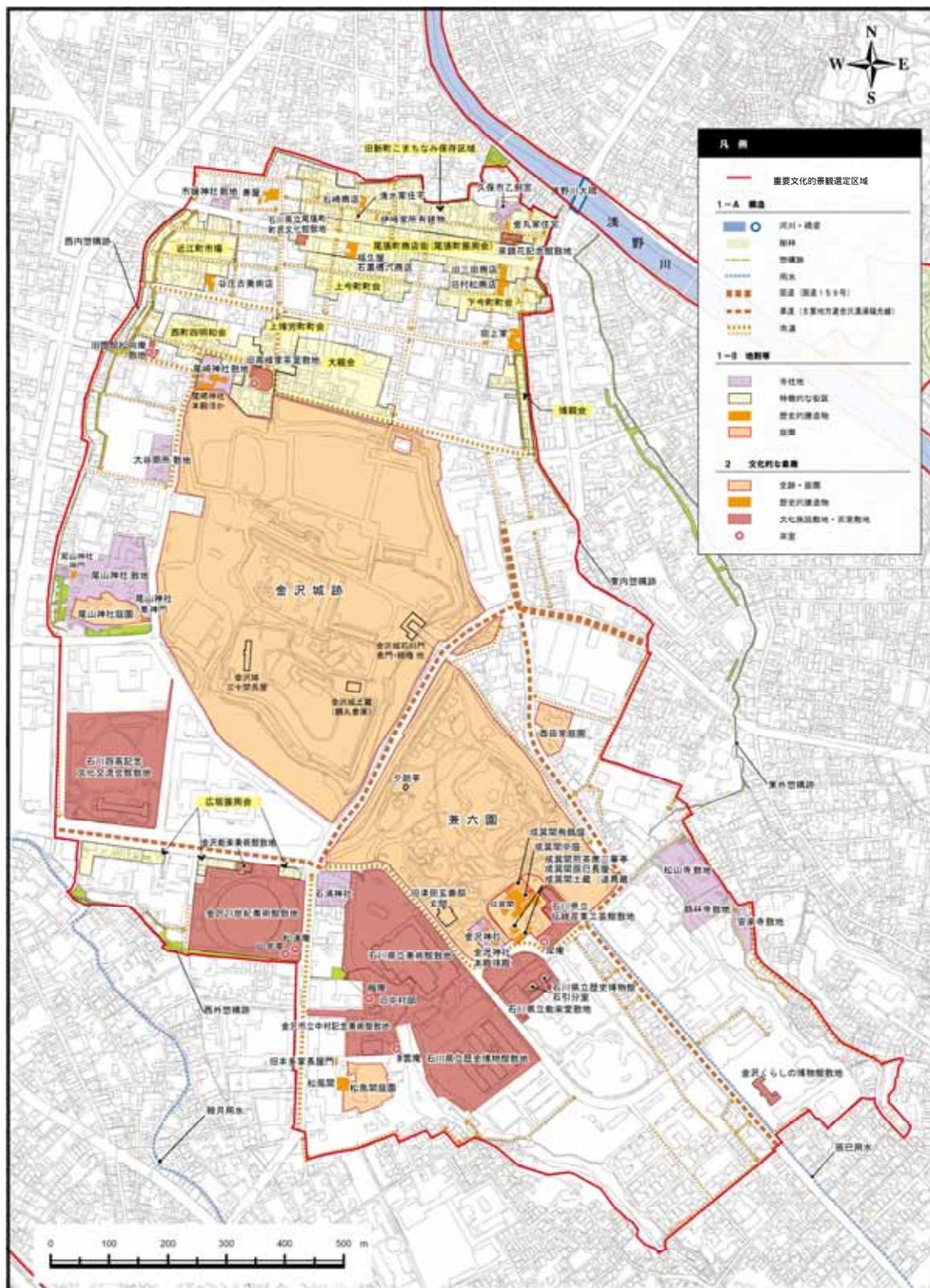
出典：「金沢の文化的景観 城下町の伝統と文化」保存計画書

※ 一般に「街区」とは、街路に囲まれた市街の一区画を意味するが、「金沢の文化的景観 城下町の伝統と文化」保存計画書における「特徴的な街区」は、1つもしくは複数の町会にまたがるコミュニティ単位として、一体的な界限性を有する地区の単位とした。



「金沢の文化的景観 城下町の伝統と文化」における重要な構成要素位置図

出典：「金沢の文化的景観 城下町の伝統と文化」保存計画書



文化的景観の重要な構成要素位置図 (重要文化的景観選定区域：金沢城跡周辺区域)

出典：「金沢の文化的景観 城下町の伝統と文化」保存計画書

(1) 城下町の計画性を示す要素

河川(犀川、浅野川)・・・城下町形成の基盤となる地形

犀川と浅野川は、城下町形成の基盤の一つであり、城下町を守る天然の要害としての役割を果たしていた。現在も金沢を代表する河川であり、流れがやさしく、繊細で情緒漂う浅野川は女川、川幅が広く悠々と流れる犀川は男川と呼ばれ、市民の憩いの場として親しまれている。また、浅野川では清流を活かした「加賀友禅流し」が藩政期以来、現在も行われている。犀川では、藩政期に心身鍛練として武士のみに鮎釣りが許されていたが、現在ではシーズンに多くの市民の太公望が見られ、鮎毛バリに金沢の伝統工芸品である「加賀毛針」を使う人も多い。河川敷は、藩政期に川原芝居小屋が、近年は園遊会等の催しが行われるなどイベント性の強い空間として利用されてきた。



浅野川；加賀友禅流し



犀川

樹林(卯辰山)・・・都市に隣接する丘陵地の貴重な緑

金沢城の鬼門に位置する卯辰山は、城の向かいにあることから、「向山」とも呼ばれ、城下町絵図、絵画などに描かれてきたように、藩政期以来、市街地から望む象徴的な自然景観を形成している。また、卯辰山一帯は、城下を見下ろす位置関係を理由に藩政期の前期において、藩の警戒管理の下にあったが、後期になると行楽地として訪れたり、4月25日には蓮如忌(レンニョサン)の野宴が行われたりするなど、城下の人々にとって身近な山として存在してきた。

現在、山全体が公園として整備され、菖蒲園がつくられるなど、市民散策の場となっており、緑豊かな木立の中に立つ文学碑、顕彰碑などが60を超え、別名碑林公園とも呼ばれている。また、兼六園の借景や都市の近郊緑地として、重要な役割を担っている。



卯辰山



卯辰山から市街地の眺望

惣構跡・・・城下町固有の構造的要素

惣構は、城を中心とした城下町を囲い込んだ堀や、堀の城側に土を盛り上げて造った土居（どい）などの防御施設のことである。金沢の城下町には、河岸段丘の自然地形を巧みに利用して、慶長4年（1599）に造られた「内惣構」と慶長15年（1610）に造られた「外惣構」が二重に巡っていたが、現在もそのほとんどが排水路として利用されている。暗渠となっている区間などもみられるが、地形の高低差や石垣の残存状況などによって位置を確認することができ、城下町の工作物が現在の都市景観に影響を与えている。



東内惣構跡の整備（枯木橋付近）



東内惣構跡沿いの通り



**東内惣構跡
（内道と外道の段差に建つ建築物）**



東内惣構跡（小将町中学校東側）



西内惣構跡（母衣町川）



西内惣構跡（近江町用水・暗渠）

用水・・・城下町固有の構造的要素

大野庄用水、鞍月用水、辰巳用水は、金沢の三大用水といわれており、金沢城下町の形成に寄与したものである。大野庄用水は、金沢最古の用水であり、金沢城築城のために木材等の物資を運ぶために利用されたとされることから別名御荷川（おにがわ）と呼ばれた。鞍月用水については、流れの一部が西外惣構堀としての役割を果たしており、金沢城の防衛に寄与していた。これらの用水は、城下町の防火や生活用水としても利用された。辰巳用水は、寛永の大火により金沢城が焼失し、防火用水の役割を果たすために造られたが、城内の飲料水や周辺の空堀を潤したことから城の防衛の役割にも寄与していた。

近代では、灌漑のほか、庭園の曲水や消防水利、積雪時における消雪、撚糸・機業・精錬業などの工業面でも利用され、市民の生活とも密接な関わりを持っている。現在、いずれの用水もその流路に大きな変化はなく、藩政期以来金沢のまちなみに潤いとやすらぎをもたらしている。



鞍月用水



大野庄用水

橋梁・・・北国街道から金沢城下への重要な入り口

浅野川大橋は江戸へ向かう参勤交代の行列が渡るなど、藩政期から重要な交通の要所であった。初代藩主前田利家が北国街道に架けたのが始まりとされており、現在のような鉄筋コンクリート造3連充腹のアーチ橋となったのは大正11年（1922）からである。金沢らしさを象徴する地域のシンボルとして多くの人に親しまれている。

犀川大橋は、藩政期の犀川に架かる唯一の橋であったことから、交通の要所として人の交流や物流が盛んであった。前田利家が北国街道に架けたのが始まりとされており、現在のような鋼製曲弦ワーレントラス橋となったのは大正13年（1924）からである。伝統を重んじながらも現代感覚を取り入れたこれらの橋は、金沢のまちなみにも馴染んでおり、重要な幹線道路としての役目を現在も果たしている。



浅野川大橋



犀川大橋

道路・・・主として藩政期の街路線形等を継承する路線

城下町を構成した街路網は、様々なかたちに屈折した細街路が多く、城下全体が迷路のように複雑な様相を見せていたが、金沢ではその基本的形態が現在も残っており、幹線道路や生活道路としての役目を果たしている。

城下町金沢の都市構造を把握するため、文政年間（1830年頃）遠藤高環により作成された金沢城下の金沢草図、金沢測量図籍について図化作業を行い、現在の地図と重ね合わせる作業を行った。その結果、藩政期の街路線形や幅員が、高い割合で一致することが判明した。



金沢草図、金沢測量図籍（石川県立図書館蔵）

[測量期間] 文政5年（1822）2月18日～文政8年（1825）6月14日 →実働378日
 [測量内容] 測量地点5,370箇所余り

寺社地

鶴林寺や松山寺などのように、城下町形成段階における寺院群建設に伴い、計画的に創建されたものや、尾山神社のように近代期に造営され初代藩主前田利家を祀るものなど、地区の歴史や特性を示す場所として重要である。



尾山神社



金沢神社



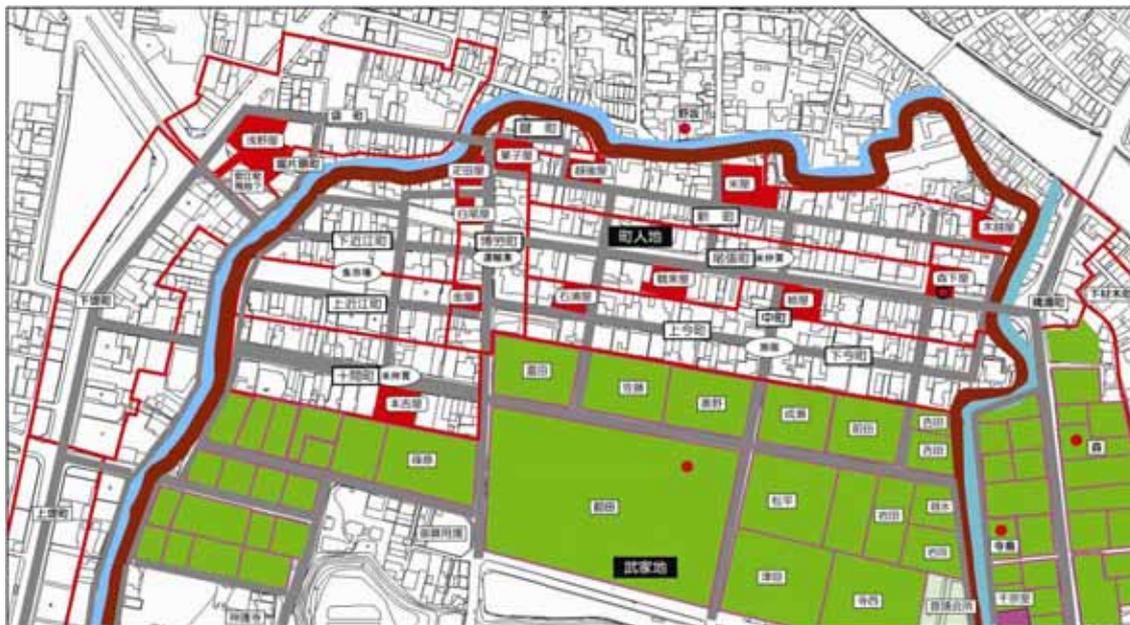
尾崎神社



久保市乙剣宮

特徴的・一体的な界限性を有する地区（特徴的な街区）

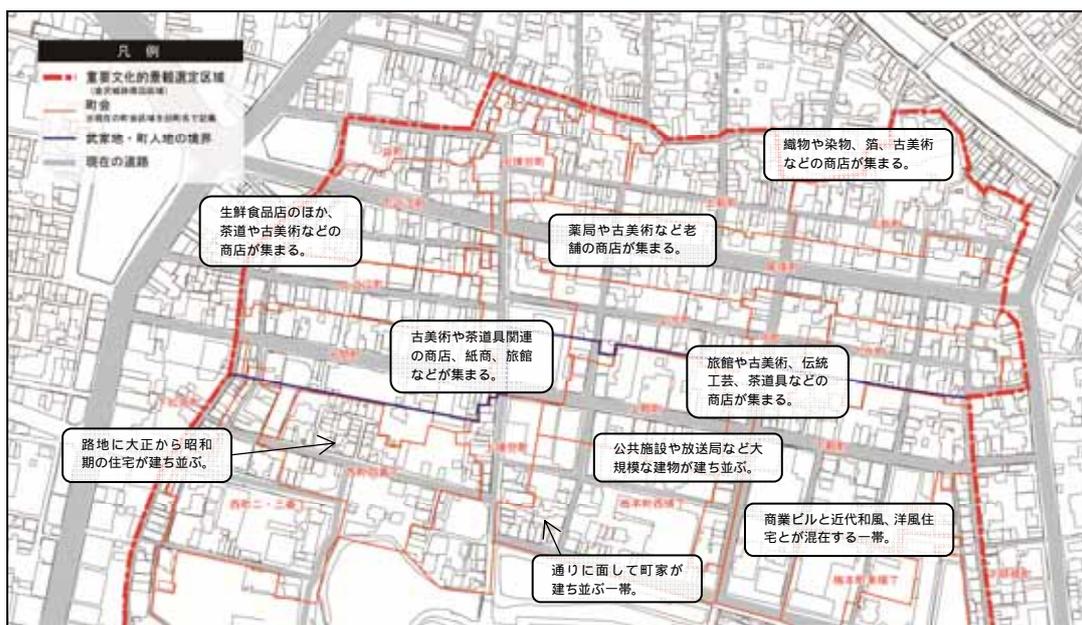
内惣構に囲まれた金沢城跡周辺区域は、藩政期には上級武士の屋敷地や本町とよばれた町地で構成されており、街路線形では直線的な街路が多かった。現在、旧北国街道の尾張町～下近江町の区間は、大正期の電車開通により拡幅されているが、それ以外の藩政期から続く街路は概ね当時の線形・幅員が維持されている。このため、旧武家地や町人地の町割、生業が現在も継承された特徴的で一体的な界限性を有する地区が形成されている。具体的には、旧町人地は商業地として継承され、旧武家地は近代以降の土地利用の変化はみられるものの、大型の街区に公共施設や元公的機関の民間ビルなどが多く立地している。



■ 武家地 ■ 大型商家 〓 街道 〓 建物(江戸) 〓 建物(明治) 〓 建物(大正)
 (金沢大絵図・1642年頃) (金沢町絵図・1811年) (金沢町絵図・1912年) (画し、千原室は江戸前期) ● 茶室

江戸後期（19世紀前半）の町割と居住者図

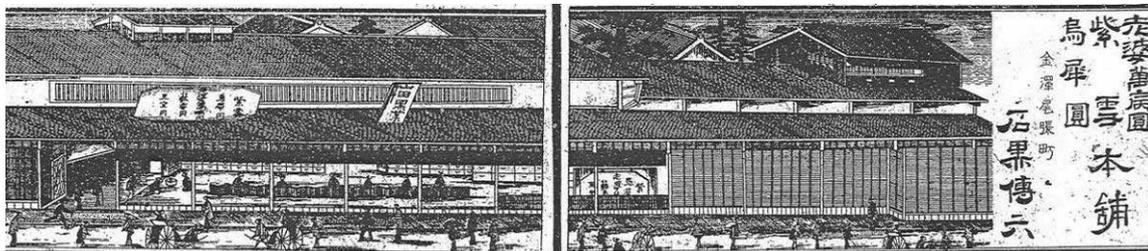
（街路形状に大きな変更がなかったことから、武家地・町人地の町割が残る。）



現在の町会区分

）尾張町商店街（尾張町振興会）

尾張町は、天正11年（1583）に前田利家が入城する際、出身地である尾張荒子で用命を承った町人を召寄せて住まわせたのが、町名の由来といわれている。旧北国街道に面する尾張町は、家柄町人格の御用商人が集まる町であり、また、藩主の参勤交代の通り道であったため、特に店構えを大切にしていたといわれている。



『石川県下商工便覧』（明治21年）に掲載された尾張町界限

明治以降は、舶来の洋品・雑貨・洋酒を扱う商店、巻煙草・洋服・靴・時計・洋菓子店など、当時の流行と先端の商品を扱う店が集まり、大正期には旧北国街道が北側に拡張され、路面電車が開通（昭和42年廃止）するなど、昭和初期まで金沢一の商業地として賑わいをみせていた。現在も、老舗や商店が数多くあり、尾張町商店街として維持・継承されている。



尾張町を走る路面電車（大正8年）

出典：「金沢市制百周年を記念して」（金沢市）



界限性を特徴づける大型町家
（天保14年（1843）創業）



福久屋石黒傳六商店
（市指定保存建造物）



能舞台を設けていた昭和初期のビル
（武田五一設計）



国道159号（旧北国街道）

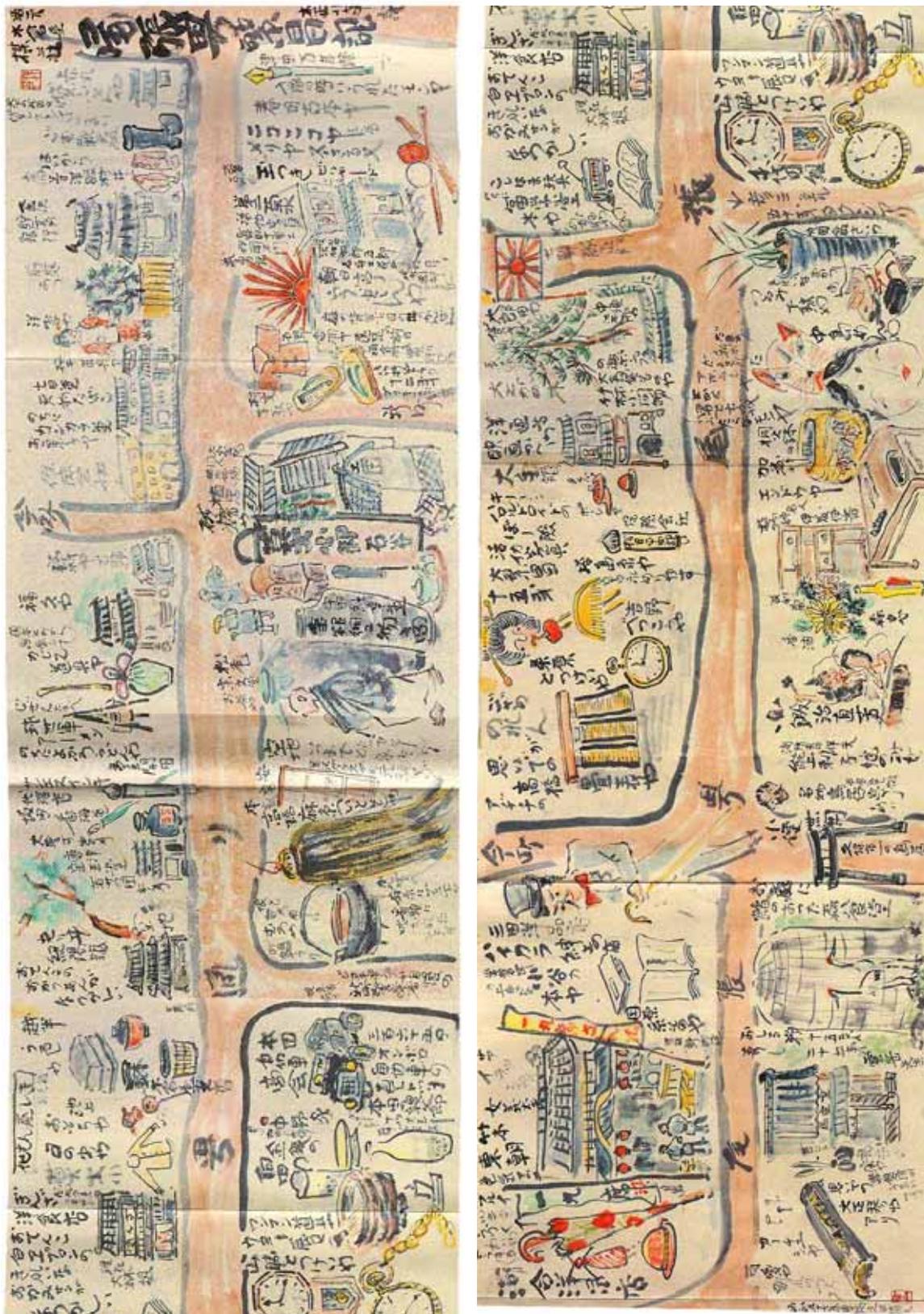


旧三田商店
（国登録文化財・市指定保存建造物）



町民文化館
（県指定有形文化財）

大正～昭和初期の尾張町商店街には、ハイカラな洋服屋、洋食屋、菓子屋、保険会社、銀行、ビリヤード場、道具屋、時計屋、莫菴屋、鍛冶屋などの商店だけでなく、第二菊水や一九席のような劇場、大衆芝居小屋もあり、様々な生業が集積する賑わいのある通りであった。



大正～昭和初期の尾張町商店街通り

出典：「どんだくれ人生」 木倉屋銈造 著

）旧新町こまちなみ保存区域

旧新町は旧北国街道の北側に位置し、尾張町の拡大に伴い新しく町立てされたことが、町名の由来とされている。藩政期には隣接する主計町や並木町とともに、浅野川界隈に栄えた商業・文化活動の舞台であった。

現在でも、工芸品販売や染色関係等の伝統的な業種が多く集まっており、赤や黒に彩られた外壁や格子戸のある建物が見られることから、往時の様子をうかがうことができる。また、金沢三文豪の一人といわれた泉鏡花などの文化人を輩出した地区でもある。



旧新町の道筋
(卯辰山方面の眺め)



旧新町の道筋
(博労町方面の眺め)



金丸家住宅
(こまちなみ保存建造物)



久保市乙剣宮



金箔工芸関連の商店



清水家住宅
(こまちなみ保存建造物)



泉鏡花記念館
(金沢都市美文化賞受賞)



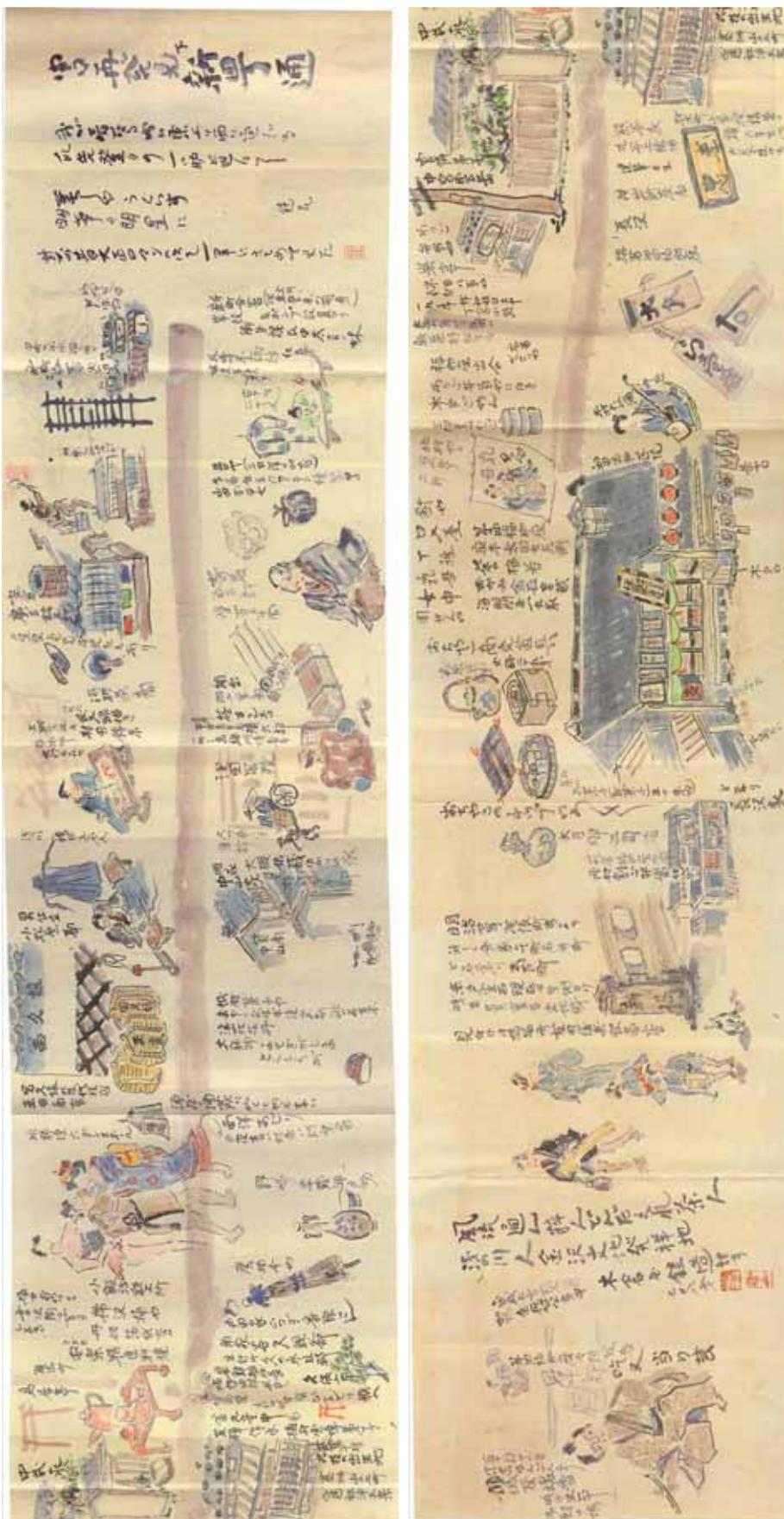
石崎商店
(こまちなみ保存建造物
・界限景観賞受賞)

大正～昭和初期の上新町では、呉服卸や茶商、八百屋、美術商、道具屋、畳屋、下駄屋、コーヒー卸商、炭屋、古着屋、銀行、質屋などの商店だけでなく、警察署の前身である新町分署などの施設も立地していた。



大正～昭和初期の上新町

出典：「どんだくれ人生」
木倉屋銈造 著



大正～昭和初期の下新町には、友禅作家、九谷紙絵師などの職人や、骨董商や菓子屋、病院、そば屋、茶商、瀬戸物屋などの生業のほか、ダンスホールのように賑わいを創出する施設も立地していた。

大正～昭和初期の下新町

出典：「どんたくれ人生」
木倉屋銈造 著

） 上今町町会・下今町町会

今町は、新町にも家屋が増え、新町よりも新しくできた町であることが、町名の由来とされている。明治維新後に陸軍第七連隊・第九師団本部が金沢城内部に設置されると、兵役に就いた息子を訪れる家族の宿の街として発展した。現在でも、茶道具や水引のような伝統工芸に関する生業の店や古美術商、旅館などがある。



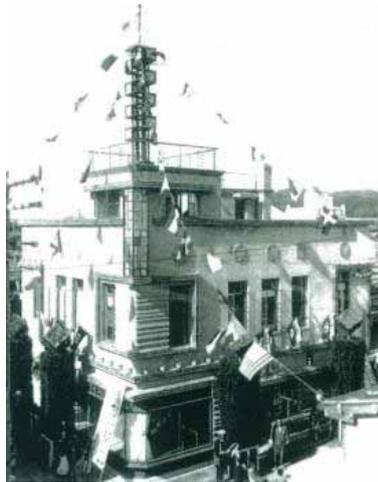
老舗旅館
(界限景観賞受賞)



伝統工芸品店



橋場町方面の眺め



昭和3年に建設された糸卸小売商のビル



平成22年現在の旧村松商店ビル
(国登録文化財・市指定保存建造物)

） 近江町市場

久保市に対して、この地に新たに今市という市場ができ、人が集まるようになったことから町が作られた。また、町名は近江国の住民が移り住んだことが由来とされている。

藩政期には、魚鳥商や四十物商など多くの商店が軒を連ね、現在でも、下近江町には明治期の建物が多く残っている。現在の市場には生鮮食品に関する商店が多く、金沢市民の台所として親しまれている。



近江町市場

）大親会（梅本町西横丁）

梅本町は、明治2年、加賀藩の老臣前田孝敬の邸地を東西に二分して作られた町で、その家紋「角の内梅輪」に因んで付けられたといわれている。

藩政期は、加賀八家の前田家（長種系）や人持組の上屋敷など、上級藩士の屋敷が建ち並んでいた。明治以降は、大規模な屋敷地跡を活かし、梅本町西横丁に石川大林正署が開設され、のちに税務署となるなど、公共施設が建てられた。

現在では、大手門周辺は大型のホテルなど大規模な建築物が多く、黒門付近には住宅や商店などが多い。



大型のホテル



大手門前から黒門方面の眺め

）博親会（下胡桃町）

東内惣構堀沿いに形成された町であり、この地にかかる橋を、橋詰にあった染師黒梅屋の名に因んで「黒梅橋」といい、俗に「くるみ橋」と呼んだことから、明治4年にこの名で町立てされた。

藩政期には、藩の公有地として利用され、平士の屋敷も立地していたが、現在は、武士系の近代和風住宅や町家を活かした商店が建ち並んでいる。



周辺景観に配慮した商店



前庭のある近代和風住宅



下胡桃町の通りの眺め

）上博労町町会

藩政期には、この地に伝馬役所があり、馬借博労が集まり住んでいたことが町名の由来といわれている（馬労町とも記した）。

上博労町には、藩の御算用場や人持組の上屋敷があり、明治以降はその規模の大きな敷地を活かして、金沢電信分局（明治11年）や検事正官舎（大正7年移築）が建てられ、現在はN T T大手町ビルや黒門前緑地などとなっている。



大規模な敷地のビル



黒門前緑地（旧検事正官舎跡）



黒門方面の眺め

）西町四明和会（西町四番丁）

西町は、金沢城主佐久間盛政時代に形成されていた尾山八町の一つといわれ、金沢御堂の西にあったことからこの町名が付いたとされている。

十間町と西町の境界には高低差があり、武家地であった西町側が高く、藩政期には、藩の御算用場や平士の屋敷があった。明治期には、武家地が南の西一番丁から北の四番丁までの四町に分けられ、現在も地区には町家などが数多くみられる。なお、金沢城が陸軍省用地となった時に、城内にあった尾崎神社が現在地に移築された。



尾崎神社



栄昌庵



西町四番丁の通りの眺め

）広坂振興会

香林坊と兼六園間を結ぶ広坂通りには、九谷焼や漆器、古美術、金箔工芸品、和菓子店など金沢の伝統産業に関連する店舗が多く集まっている。

また、金沢 21 世紀美術館や金沢能楽美術館など、新しい文化芸術関連施設もある。特に金沢 21 世紀美術館は、今や世界中から注目され、金沢の新しい芸術文化の創造の場として数多くの人々に利用されている。



広坂通りのまちなみ

(2) 文化的な象徴

金沢城跡・・・近世城下町以来の象徴

小立野台地の先端部は、中世期の寺内町に始まり、金沢城、陸軍第九師団、金沢大学と変遷し、現在は金沢城公園として整備が進んでいる。石川門や三十間長屋、鶴丸倉庫は藩政期の建築物であり、重要文化財に指定されている。また、金沢城跡として平成20年(2008)に国の史跡指定を受けた。



金沢城跡（国指定史跡）



石川門（重要文化財）

庭園群・・・藩政期に由来する武家の庭園群

寛永9年(1632)に完成した辰巳用水は、犀川上流から引き込まれ城下の中心部を流れる。本用水は兼六園へと流れ、霞が池を潤している。また、支流(旧惣構堀の一部)は城を囲むように流れて浅野川へと注がれるが、その間に、兼六園が立地する小立野台地に接した一段低い位置に作られた庭園群にも辰巳用水が利用されている。

辰巳用水の水を利用した庭園群は、兼六園(藩主)、成巽閣庭園(藩主の奥方)、尾山神社庭園(藩主別邸)、松風閣庭園(家老)、西田家庭園(家臣)によって構成される。(ただし現在は、辰巳用水から兼六園、成巽閣庭園、西田家庭園にのみ通水されている。)



兼六園：藩主
(特別名勝)



尾山神社庭園：藩主別邸
(県指定名勝)



西田家庭園：家臣
(県指定名勝)



松風閣庭園：旧加賀八家本多家庭園
(市指定名勝)

歴史的建造物・・・国・県指定文化財、国登録有形文化財建造物、金沢市の独自条例に基づく保存建造物

旧城下町区域には、歴史的建造物が広く分布しているが、金沢城跡周辺区域には金沢に現存する最古の建築物である尾崎神社本殿ほか関連施設や、尾張町で御用商人を営んでいた江戸末期建築の商家、近代に入って洋風の建築を取り入れ話題となった尾山神社神門など、近世から近代にかけての特徴的な建築物が集積している。



尾崎神社本殿ほか関連施設
(重要文化財)



尾山神社神門
(重要文化財)



福久屋石黒傳六商店
(市指定保存建造物)

文化施設・・・都市の中心部にまとまる貴重な緑地などと一体をなし、金沢の歴史と文化を継承する文化施設群

石川四高記念文化交流館や石川県立歴史博物館、尾張町町民文化館などは、明治期の貴重な建築物を文化施設として活用しているものである。また、石川県立能楽堂や石川県立伝統産業工芸館、金沢能楽美術館といった金沢の伝統文化を継承する施設があるとともに、金沢 21 世紀美術館などの文化施設は、金沢の新しい芸術文化を創造する場として多く人々に利用されている。



石川県立能楽堂



石川県立伝統産業工芸館



金沢能楽美術館



金沢 21 世紀美術館